

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	奥村 弥生
2. 審査委員	主 査： 青木多寿子（岡山大学） 副主査： 尾上 雅信（岡山大学） 委 員： 渡部 雅之（滋賀大学） 委 員： 片山 美香（岡山大学） 委 員： 寺澤 孝文（岡山大学）
3. 論文題目	情動への評価とその適応機能に関する心理学的研究
4. 審査結果の要旨	論文提出による学位申請者 奥村弥生 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学 大学規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和7年 2月6日（木） 13時～14時20分 場所：オンライン 1. 学位論文の構成と概要 第1章：「情動への評価」概念の提起 第1節：問題と目的 第2節：「情動への評価」概念の検討， 情動過程での位置づけ， その形成について 第2章：情動への評価に関する実証研究 第1節：インタビューデータからみた情動への評価の質的検討 第2節：情動への評価尺度の作成及び情動認識困難・言語化困難との関連 第3節：情動への評価と愛着との関連 第3章：情動への評価に関する応用研究 第1節：情動への評価および共感性と子どもへの情動的支援の関連 —教員養成課程の大学生を対象として— 第2節：情緒に対して恥や罪悪感を感じること —臨床事例における情動への評価概念の活用— 第4章：総合考察

第1章：「情動への評価」概念の提起

第1節では、全体の問題と目的を示した。人は、自分の怒りを恥ずかしいものと感じたり、悲しみを厄介なものと思うなど、自己の情動に対して評価的な捉え方をすることがある。本研究の目的は、このような事象を「情動への評価」と概念提起し「自己が経験した情動に対する肯定・否定の価値づけを伴う評価」と定義して検討を行うことである。第2節では先行研究を概観し、情動への評価に類似する概念との共通点及び相違点を明確にして概念整理を行い、それが情動過程でどのように位置づけられるかや、その形成について理論的検討を行った。

第2章：情動への評価に関する実証研究

第1節では、大学生ら31名にインタビュー調査を行い、情動への評価について、具体的にどのような内容があるのか、KJ法等を用いて質的な検討を行った。第2節では、前節の結果を基に測定尺度の開発を行った。その結果、3つの因子、つまり自己の情動に対する恥などの他者を意識した否定的評価である「他者懸念」、情動の必要性や有用性を認める肯定的評価である「必要性」、きつさや厄介さなど、情動を負担になるものとする否定的評価である「負担感」が見いだされた。さらに情動へ否定的評価（他者懸念・負担感）は、情動の認識困難・言語化困難との正の関連が示された。第3節では、対人関係スタイルとしての愛着との関連を検討した。その結果、情動への否定的評価と不安定な愛着スタイルとの関連が明らかになった。

第3章：情動への評価に関する応用研究

第1節では、子どもの社会情動的能力を育成する立場にある教師に注目した。教員養成学部の大学生を対象に、学生自身の情動への評価、他者の情動に関する共感性と児童生徒への情動的支援の捉え方との関連を検討した。その結果、情動への肯定的評価や共感性は、児童生徒の主体的解決をより重視するとの関連が示された。第2節では、心理臨床場面における情動への評価概念の活用について論じた。ここでは、自らの情緒に恥や罪悪感を抱き、自己の情緒を出すことができずにいた臨床事例を提示し、クライアントが抱いている情動への評価について取り扱うことが事例理解や臨床的支援に有用であることを示した。

第4章：総合考察

全体を通して「情動への評価」が広くその人の適応にどのような機能を果たすかについてまとめるとともに、教育現場や臨床現場への寄与と発展について論じた。

2. 審査経緯

本研究は「情動への評価」という新しい概念を提起したものである。その研究プロセスで、他の類似概念との相違を丁寧に整理して定義している点、精緻な尺度を丁寧に開発している点、さらに対人関係スタイルとの関係、心理臨床場面への応用、教師の情動支援の力量形成への応用等、幅広く丁寧に概念の検証を行っている点が高く評価された。なかでもこの視座が、学校教育への展開が大きく期待できる点が特に高く評価された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、奥村弥生の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。